

コリント教会の立ち上がり

パウロの2回目の伝道旅行で訪れてたちあがる。パウロは、そこでテント職人であるアクラとプリスキラという夫婦のところの下宿し、彼らの仕事を手伝いながら1年半滞在して教会を立ち上げる。

途中からシラスとテモテがそこに合流。チームで伝道活動を行う。(使徒の働き 18章 1-11)

その後、パウロはアクラとプリスキラはパウロとともにエペソに伝道に行く。(使徒の働き 18章 18-19)

聖書より読み取れるコリントの教会への4通の手紙

1 通目 I コリント 5:9 に「前に送った手紙」と記述

2 通目 I コリント人への手紙(A.D.55-56)

⇒3回目の伝道旅行でエペソより送る

3 通目 「悲しませる(決裂の)訪問・・・あのような手紙」(II コリ 2:1-3)

「あの手紙が・・・あなた方を悲しませたのを見て(パウロが)悔いた・・・」(II コリ 7:8)と記述

⇒Severe letter(厳しい手紙)と呼ばれている

4 通目 II コリント人への手紙(A.D.55-56)

⇒○マケドニアからテトスに持たせて送る(II コリ 8:18 / 9:2)

○「これから訪問しますよ~!!」(II コリ 12:21 / 13:1)

○3通目の手紙で信仰が立ち直ったコリント人、そしてパウロと和解した後の手紙
(II コリ 7:9,13,14 / 9:2)

都市「コリント」

○146 B.C.にローマ帝国によって征服、以降新約聖書の時代はローマ領「コリント」となる。

○パウロの時代：約150万人の人口

○2つの港を持つ町

西にレカイウム(Lechaeum)港、東にケンクレア(Cenchrea)港とあり、当時とても航海において危険だったペロポネソス半島(下記地図参照)をぐるっと回るリスクを回避するため多くの貿易船が、レカイウム(Lechaeum)港まで船で来て、陸路でコリントを通り、荷物を運び、東にケンクレア(Cenchrea)港から航海を再開するというのが当時の貿易航路のメインであった。両港間はおおよそ6km

そのため、商業、交易の交わる土地で、経済的にはとても豊かであり、世界中の人種、文化、哲学、宗教が溢れていた。

○オリンピックのルーツである古代ギリシャのオリンピアでのオリンピア祭典競技(776B.C.~)と同規模、所説ではそれよりも大規模だったと言われる祭典競技「イストミア大祭」が2年に一度行われていて、コリントの町はそれにより莫大な富を得ていた。

また、その祭りのメインの一つでは、ギリシャ神話の女神「アフロディ」に捧げるとのことで世界中の最高クラスの神殿娼婦が約1000人集められていた。⇒後に、この神殿娼婦のイベントに代表されるように、あまりに非道徳的とすることでローマ帝国によってイストミア大祭は廃止される。

○現代でもギリシャ語で「コリント」を語源とする KOPIVOIáceolai (korinthiazesthai: コリンエストゥタイ)という単語があり「浮気をする」という意味。日本語でいうと「コリントる=浮気をする」という感じ。

ここからも、コリント市民の道徳的墮落が顕著だったことがうかがえる。

まとめると、

とても裕福で大富豪も沢山いて、世界中の文化、娯楽が溢れる大都会。そしてそこからくる自由な空気はモラルの崩壊状態を普通としていた町。

